倫風宏話

社会の再生は一人ひとりの手中にある

上廣榮治

人はみな、明日に希望を抱いて、常に前向きに努力し続けなければならないことは言うまでもありません。それにもかかわらず、後ろを振り返って心が揺れることが時折あります。わが会六十余年の活動は果してどれほど社会の役に立てたのか。当初、目標としていた道程の、どれほどを歩むことができたのか……と。歳のせいばかりではないはずです。目にし耳にする世のさまがあまりに愚劣で衰弱したものに思えるからです。

アーノルド・J・トインビーというイギリスの歴史家がおりました。日本にも三度来訪し、特に昭和四十二年、三度目の来日のおりには、昭和天皇の前で講義をするなど、国民的な歓迎を受けましたから、覚えておられる方も多いと思います。近年の索漠とした風潮から、ふと彼のことを思い出したのです。

トインビーは、それまでの西洋中心の国家の歴史ではなく、文明という視点から、なぜその文明が興り滅んでいったのか、その原理を探究して、人類が共存共栄できる道を模索し続けました。

彼はその著書の中で社会が衰退していくときに共通して現われる条件を五つあげています。

一　国民の心にエゴイズムが生じる

二　国民が自立心を失う

三　指導者が大衆迎合を始める
四　若者の指導を怠るようになる
五　幸せを金や物の量ではかるようになる

さて、今日の世相に比べて、いかが思われるでしょうか。

まず、第一にあげられた「利己主義の蔓延」については、どなたもこれを疑うことはできないでしょう。いったい今の日本に、自分の利益を優先せず、他人や社会全体のことをまず考える人がどれほどいるか、はなはだ心もとないかぎりです。

社会全体に奉仕すべき政治家が「自分の考え」と称する暴言を常とし、行政担当者が自分たちの利益のために不正をなして恥じるところがない。誰も彼もが、自由と権利を振り回す自分勝手主義者で、社会も倫理も道徳も、法律や慣習も、人の嘆きや悲しみも、彼の欲望の前には無力です。己があることを知って、他があることを知らない者ばかりのように思えます。

トインビーはこのエゴイズムとナショナリズムこそが文明を滅ぼすというのです。

二番目の「自立心の喪失」はどうでしょうか。自立心とは、他の助けや支配なしに、自分の力で己を律し、物事をなそうとする心です。結婚しない男女、子どもをつくらない夫婦、家から出ていかない若者、ニート……。社会には、自立を嫌う生活態度と、甘えを容認する気分があふれているように思われます。これらはすべて「何をしようと個人の勝手」を認めてしまうところに発した風潮です。

三番目が指導者の「大衆迎合」です。これについても論ずるまでもないでしょう。利己主義がはびこる社会で、社会全体のことを唱えて票が集まるはずがありません。税金を安くします、補助金を出します、道路を通しますと、個人の利得に訴えるほかに票を集める方法はないのです。自分の利益を第一とし、その地位

を守るためにバラマキ財政を実施して、国の借金を増やし続けてきたのです。大衆に迎合せず、己を捨てて社会全体を思う、そんな指導者こそ真の指導者なのですが。

四番目は「若者の指導を怠ること」です。戦後六十余年、教育とは知識を詰め込むことだとされてきました。道徳も倫理も教える必要はない、テストの成績がよければよいと、親も教師も思ってきたのです。伝統的な倫理や生活慣習のすべてを封建的だとして葬り去って、それなのに新しい生活規範も築いてこなかったのが、この社会です。「指導を怠る」どころか、まったく指導をしてこなかったのです。それどころか、社会は悪しき見本を見せ続けてきたのです。

その結果、ある調査によれば、親の言うことはきかなくてもいい、親には反抗するものだと思っている高校生が全体のおよそ八五パーセントに上っているといいます。さらに先生に反抗することを肯定している生徒は八〇パーセント近くもいるというのですから、ほとんどの子どもが、親や教師など指導する者には反抗すべきだと思い込んでいることになります。

なぜ、彼らがそうなったかは明らかです。それは親や教師が「指導を怠った」からであり、さらに遡ればさかのぼ、戦後社会は親の尊厳も教師の権威も、すべて封建遺制だとして捨て去ってしまったからです。

親や教師や教育行政に携わる者、つまり指導者が子どもたちに媚びへつらい「迎合」してきたといってもこびよいでしょう。誰もが指導者としての自覚を失ってきたのです。

さて、最後は「幸せを金や物ではかる」風潮です。これこそ何の説明も必要ではありますまい。ここまでくると、最初に申し上げた私の無念な思いも、すっかりおわかりいただけたかと思います。トインビーがあげた社会衰退の条件は、すべて私たちの社会に完全な形で出揃っているのです。

わが会は、これら五つの条件のすべての要素を徹底的に排除して、真の仕合わせを築くべく努力してきま

した。しかし、六十余年にわたって精進と普及を重ねた現在もまだ、私たちはかかる暗闇に取り囲まれているのです。無明の長夜に先輩諸賢が明々と掲げた倫理の灯火は、いまだまことに小さな火でしかないのではないか、そうした迷いが時として去来し、そのたびに、もっともっと、この火を大きく燃え立たせ、社会のすみずみまで照らしていかなければならないという気持ちに駆り立てられるのです。

先師や先輩たちの尊い活動の継承者である皆様に、何ゆえ、そして何を、受け継ぎ発展させていかねばならないのか、それをしっかりと心に止めていただきたくて、私の思いの一端を書きつらねた次第です。

私はこの社会に限りない愛着をもっております。だからこそ、トインビーがいう社会を滅ぼす五つの条件をすべて否定することができるわが会の精神と実践を信じ、日々の努力を重ねるのです。

一人でも多くの方に、倫理の実践によって仕合わせを実現して、それを親から子へ伝えていただくことで、この社会の滅びを防ぎたいのです。それができるのは、皆様方一人ひとりなのです。

最後にトインビーの言葉を引用しておきます。

「たとえそれに打ち克つ保証はないにしても、われわれはなお、人生の闘いに勝利すべく奮闘しなければならない」「行き詰まったら、昨日とは違う新しい自分を創造することだ。空に一点の星も見えないのなら、自分の心に明々と希望の松明を掲げるまでだ」